

UIFA JAP●N

NEWSLETTER

■主な内容

特集 第11回UIFAハンガリー大会

- ・ハンガリー大会概要
- ・発表論文について
- ・発表パネルについて
- ・ハンガリー大会日記
- ・ハンガリーの印象
- ・第12回UIFA日本大会に向けて
- ・会員の自己紹介 No.3

■第11回 UIFAハンガリー大会概要

山田 規矩子

テーマ：国家的建築遺産の復元と再生

会場：ブダペスト、MTESZ及び国会議事堂

参加国：35ヶ国

参加者：200名 日本人参加者 29名

発表者：35名 日本人発表者 4名

会期：日程表

- | | |
|------------------|--|
| 9月1日(日) | 参加登録 カクテルパーティ |
| 9月2日(月) | 開会式、セッション
王宮の丘見学
兵器歴史博物館にてレセプション |
| 9月3日(火) | セッション
市内第9街区の再開発見学 |
| 9月4日(水) | 国会議事堂にてセッション
国会議事堂内見学
ハンガリー建築家協会会館にて展覧会の開会式とレセプション |
| 9月5日(木) | UIFA幹事国代表の打合せ
全体会議 次期開催国は日本に決定
閉会式、ドナウ河船上にて晩餐会 |
| 9月6日(金) | バラトン湖畔の街ケストヘイ、ティハニー及びサントブスタの見学 |
| 9月7日(土) | ケチケメート市庁舎にて市長歓迎挨拶
市内見学、ブガーシュにて馬のショー |
| 9月8日(日) | 手厚く保護されているホーロックの民家見学、エゲル市庁舎にて市長歓迎挨拶、市内見学、大聖堂でオルガン演奏 |
| 9月9日(月)～9月11日(水) | ウィーン見学ツアー |

■発表論文について

坂東 みさ子

9月2日から4日までの3日間に渡って論文の発表が行われた。今回の大会のテーマに沿った論題のものが27、プレゼンテーションとして女性建築家に関するもの等6、その他UIFA自体に関するもの2の計35の論文が発表された。これを国別に見ると、日本が4（日本の米国キャロル氏を含む）、クロアチア5、アメリカ3、韓国3、ハンガリー2、ベルギー2、南アフリカ2、ドイツ2、ルーマニア2、オーストラリア・ポーランド・デンマーク・カナダ・メキシコ・コートジボアール・ボヘミア・インド・ノルウェー・シリアが各1の19ヶ国となっている。1論文当たり15分という時間に納まりきらず、発表者が司会者と渡り合う場面や時間カウントの方法に戸惑う場面も有り、会の進行の難しさも垣間見えた。日本からの発表は9月2日に寺田生子・渡辺美紀両氏による「レヒネル・エデンの建築の保存へのアピール」、3日には古村伸子氏の「市民参加によるコミュニティづくり」、4日には小川信子氏の「日本に於ける女性建築家の戦後史」、キャロル・マンク氏の「日本に於けるアメリカ建築家」であった。又、9月4日の前半、座長松川淳子氏他中原暢子、飯島静江、東由美子の各氏が当日の会場である国会議事堂会議場の壇上に上り、司会役をつとめた。

■発表パネルについて

9月4日午後6時から若干のセレモニーの後、パネル展示を見る機会を得た。20数点の展示があった。スペースがあまり広くないので一時に見るには混み合いすぎの感があった。説明しながらパンフレットを補足資料として配布する方法(ex. ラトビアのリガについて)は後でゆっくり見る為にも良いと感じた。日本の展示や、松川淳子氏の展示には幾つかの興味ある反応があったようだ。2年後の日本での開催に向けて展示の方法、期間、スペース等の課題も多いと感じた。

UIFA JAPON

■ハンガリー大会日記

9月1日(日) UIFAハンガリー大会のスタート 阿部 祥子

ブダペストの空港には兵士が立ち、窓外に目を転じると、屋根の吹き飛んだ廃墟のような家が点在し、この国が抱えてきた歴史の重さを思いつつ、UIFAハンガリー大会へ向かった。

大会は、9月1日(日) Registrationの後、夕方6時ホテルでの親睦パーティから始まった。インドやアフリカなどそれと分かる国だけでなく、特定できない数多くの国々から150余名の建築に関わる女性達が参集した。日本からの参加者は、現地からの、日本からの直行の、各地を旅しての計20名が参加した。

お酒とプチ菓子が用意された立式のパーティ会場には、私は始めて国際会議に出席するということもあり、開会の辞や乾杯の音頭など、わが国での段取りを頭に描きながら、ちょっぴり緊張して臨んだ。実際には、これまでの大会でできている友人や知人との再会は、自然に人の輪と和をつくり、会はいつのまにか始まっていた。

砕けた雰囲気ができだしたころ、ハンガリー大会委員長マリア・ヘエッシュさんの歓迎の辞と、会の創始者ソランジュ・ドラトゥールさんの挨拶があった。ルーマニアの建築家は、英語は母国語じゃないから難しいといい、外国にも英語の苦手な人がいると安心した。参集した女性達は、個性的でチャーミングであり、ともに環境をつくる仲間として力強さも確かめた出会いがあり、楽しい時間であった。



カクテルパーティ

9月2日(月)

小島 久実

10:30 開会式 MTE SZ—House of Technics

大会の主会場のMTE SZ(コロナホテルから地下鉄で15分の国会議事等の向かい、ドナウ河沿いの近代建築)で催され、開会が女性の環境大臣により、ついでUIFAハンガリー会長マリア・ヘエッシュ氏の挨拶で「国家的建築遺産の復元と再生」を主題に開会した。12:30~14:00 コーヒー・ブレイク後のセッションでハンガリー等6ヶ国の代表のプレゼンテーションの中に、日本から研究留学中の寺田、渡辺さんがレヒネル作品の保存をアピールし印象的だった。15:00~ バス3台でベシュト区北部の英雄広場の記念館(最近塗り直し、新しい建具が入り地下をレストランに有効利用しているが文化遺産の魅力がうすれている)、レヒネルの応用美術館(建物内外の傷みが進んで内壁が白く塗られているが、元のパターンの図面がなく再現不可能と聞き、保存の難しさを再考した)を見学、途上、街路沿いに建つ重厚な石の建物群は100年余の油煙、湿気、ガスなどで黒変し、洗い出しや塗りかえされたビルと対象が激しく表通りでも最新デザインのビルは少数で周囲との融合を企てて、全体

に20世紀初頭の都市のイメージなのだろう。夕暮時 ブダ地区の丘上の王宮街区に登り散策、行きついた兵器博物館内ホールで歓迎レセプション、歴史的な建物



ハンガリー会長の開会宣言

での雰囲気あるパーティが開かれた。

9月3日(火)

高橋 尚美

会議2日目、会議場への道も覚え、周囲の建物を眺めながらブダペストの街を歩く余裕も出てきました。午前中はUIFA JAPONから古村さんの堂々たる発表を含め、10ヶ国、16人の発表がありました。

午後は現在ブダペスト市が行なっているスラムの再開発事業の現状スタディーツアーに向かいました。年金生活者や失業者等が多く住む、煉瓦平屋建ての長屋が多く建つ劣悪な住環境である地域を、地下鉄を开通させ、既存の建物を再利用しながら、中庭囲み型の集合住宅、オフィス、コンサートホール、ホテル等に建て替えていくという内容です。(現在1/10程度完成)民間ディベロッパーも参画した分譲・賃貸の集合住宅(一部は市が社会住宅として借り上げている)を見学しました。道路側はブダペスト特有の廃棄ガスに煤けた五階程の建物が、中庭側は色鮮やかなデザインの生活感溢れる空間が作られていたり、社会主義時代に作られた画一的な住宅に対し、一戸当たり40~80㎡の広さ・形を住民が選択できるという新しい試みがなされるなど、ハンガリーの新しい風を感じることができました。しかし、市の議員が「みてみて、この路地空間、素敵なのよね。」と指をさしたスラムの住宅の中庭はとても美しいものでした。古くからあるコミュニティーの崩壊、市の低所得者向けの借上げ社会住宅の廃止など、問題は山積しているようです。都市として日本と同じ様な悩みを持つ、ハンガリーのこれからを再び見てみたいという決意を胸に、帰途につきました。

9月4日(火)

井出 幸子

2日遅れてブダペスト入りをしセッションに参加。国会議事堂が会議場である。日本からの代表が議事進行役を務めるなか、「国家的建築遺産の復元と再生」というメインテーマに基づき報告が行われた。韓国からは由緒ある町並みを、ただ単に伝統的な生活形態を維持するだけでなく、商業的要素で活性化させ、積極的に保存と調和を計ってきたという報告、カナダからは17世紀の名残ある旧市街・湾の中空を横切る高速道路の計画に対し、もっと適切な地域を提案し計画を変更させ、ついで、取り壊し・改築などのチェックをする組織が創られたという報告、インドからは建築遺産の多くある地域で、新築・増築の仕事を通し、単に古典建築の模倣でなく、その意味と精神とを、現代の求める物や建築技術と調和させ経過してきたという報告、さらにはコートデュボアールからのコロニアル建築の保存と再生の報告も印象的。コーヒーブレイク後「女性建築家の戦後史」としてまず日本からの報告、ついで米国・ドイツなどの報告があった。ランチの後は議事堂の見学。ハンガリーの20代の若者による通訳と付加説明を聞く。特にドラフトを有効に利用した解りやすい空調システムに感激、天変地異何が起ころうともどうにかなりそうな確かなものを感じる。保存と再生のキーワードにシンプルなシステムの見直しという項目が加わっても良さそうだ。



壇上は日本代表

9月5日(水)

古村 伸子

14:00 ~ Closing Session MTESZ-House of Technicsにて

この日午前中に開かれた各国代表による会議の報告に続いて第11回UIFA Congress を締めくくるセッションが行われました。

「スピーチの後に討議の時間を取って欲しい」「インターネットのホームページを開いて情報交換ができるとよい」などの意見が出されました。今回は採択されませんでした。最近の国際会議ではコンピュータ通信が欠かせないものになってきていることから、今後はこのようなシステムの導入も検討されるようになっていくかもしれません。

最後にUIFA Japonから、中原会長と松川理事が、次回日本での大会開催提案を行い、拍手によって採択されました。

16:30 ~ 閉会式

前回のレセプションでも挨拶して下さった、ハンガリー建築家協会、都市計画協会の各代表に加え、ハンガリー政府・議会からも錚々たる顔ぶれによる祝辞があり、今回の会議の幕が閉じられました。

19:00 ~ 閉会パーティー 客船TANCSIKSKE

ドナウ川に浮かぶ船の上で、ライトアップされた見事な夜景を楽しみながら、打ち解けた雰囲気ですパーティーが行われました。



船上でのクロージングパーティー

9月6日(木) ステイヴ7-1日目 バラトン湖へ

正宗 量子

三台のバスに分乗、スタディーツアーの目的地、中央ヨーロッパ最大のバラトン湖へ。ブダペストから90kmの小旅行だ。豊かな自然と茶色に枯れたひまわり平原が車窓に広がる。湖北西の町ケストハイのフェシュテテイクス宮殿を訪ねる。博物館では、古い武器を展示中。市民に開かれたタウンホールからは、若者が奏でるヴァイオリンの練習曲が白亜の宮殿に優しく響く。図書館、庭園など整備され修復されて使われ続けてきた歴史を想う。右手に湖を見つづ半島まで走る。小雨のせいか湖水の色がどす黒く濁った緑色だ。今にも魔女が出そうな不気味ささえ感じる。半島の丘に美しく立つティハニー修道院は、1754年建造のバロック様式。アジアに繋がる異民族の血が流れるハンガリーの人々。誇り豊かに芸術文化を築いてきたこの国、都市、そして村の自立と繁栄の証しとして、今尚もこの丘上に聳えているように感じる。しかし、東のロシア、南のオーストリア、西のドイツに囲まれながら、内外の力を導入しつつ高い精神文化を築き上げてきたこの国の、何か悲劇的な永い歴史が、この日のバラトン湖の色調に例えられるような気がしてならなかった。

フェリーボートで対岸に渡り、ユーロパノストラ賞を受賞したサントブスタ農場の幾つかの農労者の住居や、農民の歴史や暮らしを辿れる小村を見学後、温かな豚の丸煮に舌鼓を打った。



サントブスタ農場の馬小屋

9月7日(金) ステイヴ7-2日目

田中 美恵子

ブダペストを南下し、ケチケメートに向かう。ポプラ並木の続く両側は向日葵(油を採る)葡萄・杏畠。遥か彼方にはフォアグラを取る鷺鳥を飼育する村が続く。ワインや名産焼酎パーリンカ等、ハンガリー経済を農業面から支える地帯である。車は市庁舎の10時の鐘と共に奏でられるコダーイの音楽を聞かせる為スピードを上げる。今日は土曜日、市庁舎で調印を終え、教会に向かう新婚のカップルに三度も出会う。建築家レヒネルの生誕地で、玩具博物館等、設計された建物が多く、市庁舎もその一つでセセッション建築の代表として市の中心を占め、全面のプラザを囲み各宗派の教会が並ぶ。我々は金色の華やかな市庁舎の議会で正式な歓迎を受ける。ドラトゥール会長、ハンガリーの会長と共に次期大会開催国としてであろうか日本も贈り物を受ける。コダーイ音楽研究所等建物博物館の様な街並みをゆっくり味わいたいと思いつつ次ぎのナショナルパークへ。馬車に揺られ、大草原を体験し、馬術の妙味を楽しむ。友愛の表現なのか鼻面が擦り寄る。原生種の保護林を散策。強風と雨で寒さに震え上がっていたが、森の中は暖かく静かで大自然の懐を実感する。

草原の中のレストランでボルシチの様なパプリカの煮込み料理とワインを頂く。チターの音楽でダンスが始まり、会長の少女の様に飛び跳ねる姿が忘れられない。



ケチケメートの市街

9月8日(土) ステイヴ7-3日目

峰 成子

8:40 出発。ユネスコにより独自の生活様式を保存されている13Cの村ホーロッケにむかう。1時間余で青々とした丘に囲まれた小さな村に着く。やや大きい店で熱いコーヒーと甘いケーキが出、派手な民族衣装のおばあちゃんが糸巻を繰りながら紡ぎ歌(多分)を歌ってくれる。石畳の両側は白壁・赤屋根の素朴な家並が続き、顔を出す年寄は一律にすっぽりした黒服であり、何やら時代を遡ったような不思議な雰囲気を味わいながらあるいた。

11:30 出発して東へ。2時間位でエゲルに到着。エゲルは、重要文化財の多さでは3位の市だけあって古い大きな建物が目立つ落ちついた美しい街である。どこも絵になる感じ。少し見学してシティーホールへ。市長とドラトゥールさんの挨拶があり、そのおり「今日が私の誕生日」と明かした彼女の為に、先に配られていたワインでお祝いの乾杯をする。OHPでエゲル市の概要紹介もあった。図書館を見学し、協会ではバッハなど5曲パイプオルガンコンサートの観賞。17:30まで見学し、美女谷のワインセラーで最終のディナー。特殊のガラス容器でワインが注がれ、生演奏付の豪華な食事後ソランジュのハッピーバースデー大合唱で終る。



ホーロッケの民家



エゲルのワインセラー

9月9日(日) 糸コンgres77- ウィーン1日目 永井 彩子

薄曇りちょっと肌寒い朝。今日はドナウを遡ってウィーンへ。

8:00 フォラムホテルを出て国際線船着場へ

9:00 出発 U I F Aのメンバーは38名、そのうちJAPON は8名。

いくつもの橋をくぐってブダペストともいよいよお別れです。

ブダ側は、王宮のまわりの濃い緑の中に点々と家の連なった美しい住宅地、ペスト側は水際の道路を車がすごいスピードで走っています。船内は前・中央・後に50個ほどずつの座席があって、中央部が喫煙席、ここに軽食をサービスするところがあります。私共はもたもたしていたせいか後部座席になりました(音の事や、景色のことを考えると早く来て前に座るのが良いようです)。船は横揺れもなく、滑るように進んで時々貨物船のような大きな船も追いついてゆきます。1時間ほどして右側から入っていた日差しが急に後ろに廻ります。フィッシュグラードでドナウはほぼ直角に西に向かうのです。丘の上にエステルゴムの大聖堂が見えると右側はスロバキア、国境線に沿って遡ることになります。両岸は水辺まで大きな樹が垂れ下がっていたり、小さな船が一つ繋いであってそこから細い道が草の中に消えていたり、川に堤防のある日本ではあまり目にしない風景が続きます。途中二つの水門で8Mほどの落差を上がって(25分ぐらいかかります)



ウィーンのパークラフト

15:30 雨のウィーンに着きました。

9月10日(月) 糸コンgres77- ウィーン2日目 山本 敏子-其親代

9月10日、ウィーン滞在2日目の朝を迎え、早朝の市場へ井出、柏原さんは市場へ市民の生活の視察に出掛け、食料品を仕入れてきた。このことが夜役に立つことになる。朝食後、渡辺、井出、坂東さんは地下鉄、市電を使い、オットー・ワグナーなど世紀末建築を資料片手に、精力的な見学をしたようだ。日高、永井さんと私はハンガリーの天候不順に体調をくずしホテルに。柏原さんは夜のオペラ券の手配にと、午前中の事務局主催の市内観光は全員バスをした。ウィーンも寒く、天候も不順でした。私は5年ぶりのウィーンでしたので、午後より聖シュテファン寺院や周辺を回りました。前回より何か観光を中心に新しい街の変化を感じました。ランチなどイタリアンを中心にしたカフェテリア式のものが目立ちました。

夜、日高、永井、柏原さんはオペラ座へ「ホフマン」を正装してでかけた。渡辺、井出、坂東さんと山本は美しい泉の城のシェーンブルン宮殿で行われるオペラ、バレエなどのコンサートにでかけた。お城の中でモーツァルトのフィガロの結婚やシトラウスの青きドナウのワルツなどの音楽を楽しみ余韻を残しホテルに帰った。オペラ組の興奮したオペラのサロン文化の話に、コンサート組も加わり、二次会となり、早朝仕入れた食料品が私たちの胃の中にはいってしまい、ウィーンの2日目は終わりました。



シュテファン寺院

9月11日(火) 糸コンgres77- ウィーン3日目 柏原 雪子

「ウィーンに行ったらやっぱりオペラ!」と思い立ったら、まずはチケット。やっとの事で手に入れたボックスシート。懐はさみしくなったが、胸はドキドキ。期待でいっぱい。ルネッサンス様式で、1869年に完成した国立オペラ劇場。柿落としてはモーツァルトの『ドン・ジョバンニ』。そしてかのマーラーが総監督を務めた時期に、超一流のオペラ劇場としての地位を固めたそうだ。

劇場のエントランスは天井が高く、壮麗な大理石の階段に絢爛たるシャンデリアが幾つも…。驚くべき余裕の空間である。日本ならこの中に2つや3つの小ホールを詰め込んでしまうだろう。思わず口を開けたまま天井に見とれてしまった。

ボックスシートは部屋ごとに扉があり、プライバシー対策も万全。扉を開けるとまずは前室、そこにコート掛けや帽子掛けがあった。シートは、最前列から3、2、1席の計6席。ただし興奮のためか最前列以外は結局は立ち見となるらしい。

この一大空間で毎夜くり広げられる社交は、さすがにハプスブルグに連なる宮廷貴族たちの伝統・文化を感じさせ、日本人が真似をしようとしても、一朝一夕には無理だということを感じさせられた。開演のベルがなる。今日の催し物はオッペンバウハの『ホフマン物語』。さて、はじまり、はじまり。



国立オペラ劇場

■ハンガリー・ブダペストの印象 船津 貴子

真夏の東京を飛び立ち乗り継いで着いたブダペストは既に秋の色濃いつとりの街でした。見上げると街のあちこちに荘厳な寺院の色鮮やかな三角屋根や尖塔が見えて思わず足を止めます。又建物の特徴づける装飾性あふれるバラベットの立ち上りはヨーロッパの建物と異ったハンガリー風アールヌーヴォーの時代を偲ばせます。古い建物と隣接する新しい建物とは調和していると云い難いのに、街全体は不思議な魅力を持っています。第2次世界大戦終結時に市内の建物の80%とドナウに架かる橋すべてが破壊されたと言われますが旧き時代の面影を濃く残して修復させた力は何に依るものでしょうか。朝早く出掛けた19世紀建築の傑作と云われる中央市場では1階に肉ソーセージ類、野菜、果物等が山積みにして売られておりその品数の豊富なこと、カラフルなことこの国の食の豊かさに充分ふれる事ができました。2階は刺繍製品を主とした衣料民芸品であふれる感じの店々が並び目を楽しませてくれます。売る人達も愛想よく素朴でしかも内に強さを秘めている様に見受けました。歴史の移り変わりの中でしっかりとハンガリー色を伝えてきた国の21世紀への歩みをこれから見とどけたいと強く感じた旅でした。



ブダペスト中央市場

■第12回U I F A日本大会に向けて

◇日本-U I F A JAPON-からの提案がオーソライズされました！

松川 淳子

ハンガリー大会の第4日目、早朝から行われた幹事国代表者会議の席で、次回大会についての検討が行われました。U I F A JAPONからの提案は、「第12回大会は日本で。1998年9月頃に。テーマは『環境共生時代の人・建築・都市-21世紀における、調和的関係の構築をめざして-』。開催場所は東京か横浜で」というものです。事前に憶測を交えた情報が流れて、他の国々からも立候補があるのではないかと、緊張して臨んだ日本メンバーでしたが、全員一致、大歓迎で提案がオーソライズされ、午後の総括セッションで公式に発表しようということになってしまいました。うれしさの半面、責任の重さと、資金をはじめ、実現までの多くの課題に身震いするような気持です。でも、U I F Aも創立以来すでに33年。世界の都市で開かれる楽しい大会に参加するだけでなく、世界の友人たちを心から迎え、おもてなしする役割も立派に果たしたいものです。

さしあたり、大会のための実行委員会を組んで全会員や関連組織からのチエを集める予定。2年後の楽しい会の実現にむけてがんばりましょう！！（同封のチラシは日本の提案書のコピーです。本物は2色刷。提案書なので、予定であることにご注意下さい！！）

◇U I F A大会の運営

小渡佳代子

U I F A大会の運営は、開催する国によってその方法は様々。ハンガリー大会では、午前中セッション、午後見学、夜はレセプションの構成。この形式はセッションの印象が薄く、建築遺産の少ない国にとって、テーマも問題だった。午前午後それぞれ基調講演があり、発表をフルに行ったワシントン大会は「住まい」がテーマだった為、各国の発表もその国情の差はあれ、女性建築家の仕事に共感した。コペンハーゲンの大会は、基調講演で始まり、3つの分科会に別れての議論、分散されて全部が聞けないとか、言葉の壁も大きかったが、中身は濃く、今でも印象に残っている。ケープタウン大会は、80名と少なく、参加者全員が親睦を深めたことに意義があった。パネル展示について言えば、発表者は、時間をかけ製作し展示するのだから、今回のように別会場でレセプションの前にちょっと見るだけというのは残念な気がする。拙い英語でも、パネルの前でそれを話題にして飲みながら盛り上がった大会もある。

会議会場と展示が同一会場で、会議中展示が見れるのもいいと思う。せっかくの機会であるから、日本を含め色々な国の女性建築家の展示と発表に触れ、21世紀に向かう私達の指針になればと思っている。



展示パネル（日本）



リトニア「地理学研究所」階段踊り場



ハンガリーの温泉

◇各国の反応

東 由美子

日本大会に対する各国の反応はおおむね良好だったと言えるが、その主なものを場面に分けて紹介したい。

(1) ドラトゥール会長のコメント

各国の人たちは、みな日本で旅行を楽しみにしている。会議後の旅行は少なくとも5日はとって欲しい。神戸にも関心がある。会議の場所については開催国にまかせる。

言葉はすべて英語の他にフランス語も使用して欲しい。フランス語翻訳のための予算獲得のため努力中である。

分科会は与えられない会ができるので望ましくないと思う。

また、経済的に困難な国の人達を考慮して登録料を安くしたり、安い宿泊所を用意したりして欲しい。

(2) 代表者会議での反応

次回開催国を日本に決定した後、開催経験国からは協力はおしまないからとのコメントがあった。また、ハンガリーからは常にドラトゥールさんと連絡をとりながら準備すべきだとの助言があった。開催の場所についてはアメリカのヘスティングさんから横浜のほうが静かで良いとの意見が出されたが他の人からのコメントは特に無かった。

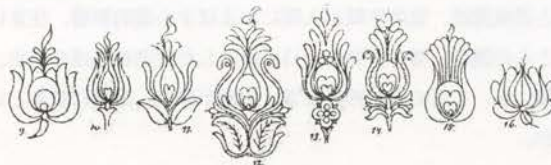
(3) 参加者の反応

会場とったアンケートには44名が日本での会議に出席したいと書いてくれた。そのアンケートでのコメントや会場、パーティーでの反応の主なものは、経済的負担を心配するものが多かった。

開催の場所や旅行については、アメリカナイズされた場所ではなく日本的な所にして欲しいという意見が多く、京都を見たいという意見も多かった。

会議の内容については、色々な国の人が参加しやすいよう、テーマをあまり絞らないで欲しいとする意見と同時に、もっとテーマにそって発表すべきとの意見もだされた。もっとディスカッションの時間をとって欲しいとの声もあった。

日本では物価が高いことが知れわたっているとみえ、できるだけ安くという声が多かったので、私たちもそれにこたえるよう努力しなければと思う。



『マジアルの形態』より

■会員の自己紹介 No. 3

9410083 沖山 奉子

はじめまして。会員番号9410083の沖山と申します。会員になってから2年目のニューフェイスです。生まれは、東京都の端っこにある。伊豆七島の八丈島です。南の島で生まれたせいか、性格はのんびりで、回りから太っ腹とされています。



勤務先は、東亜建設工業 という建設会社で、現在は営業部に所属しております。仕事の内容は福祉関連のコンサルをやっています。

現在凝っている趣味は、山登りと美術館巡りです。この連休中にも、三越の特別展と安田火災のゴッホ展を見に行きました。最近、一番感激した展示会は横浜市立美術館のゴッホ展ですが、2時間待ちを耐えて、ようやく入場ができました。中に入っても満員電車並の混雑で……。でも、絵はすばらしかったです。

山登りの方は始めたばかりで、標高3000mの白馬岳に登ったのが今までの中で唯一自慢できるものです。登山用の靴まで買って張り切っているのですが、友人は軟弱で仲間と一緒に登ってくれないので、欲求不満気味です。誰か、山登りの得意な方がいらっしゃいましたら、是非お誘い下さい。但し、何分素人なのでご迷惑をかけるかもしれないことを念のためお断り申しあげておきます。

921009 川嶋 幸江

東京大森生まれ。居を移すこと10回。現在南千住在66すかいパス事務所主催。その間、文化学院・桑沢デザインスクール・日本女子大非常勤講師。石油ショックで事務所解散、三井ホームインテリアコーディネーターに。手掛けた住宅約60軒。'84年共栄学園短期大学へ。'86年ミシガン大学聴講生。現在同短大住居学科教授。室内空間と透視図法、室内空間が人間におよぼす心理的影響、住まいとモノと人の関係、等を研究中。11月設計した住宅が完成の予定、欣喜雀躍。が、二足の草鞋の難しさ。加齢が原因。華麗に変身といきたいが。



■第9回海外交流会の会

◇五島聖子氏講演「ランドスケープの役割と現代の傾向」に参加して

寺尾 信子

UIFAのメンバーでもある五島さんは、日米両国で活躍されている方が初対面の参加者も多かったようだ。私は4月上旬北米西海岸の住宅地の視察旅行をした際、当地のランドスケープアーキテクトの役割の大きさを目の当たりにしていたので、7/27の講演を楽しみにしていた。講演では、18Cまでの幾何学模様のイギリスの庭園、18C以降のフランスの風景式庭園の話題に始まり、大自然の中に都市を造るアメリカの公共領域の設計の話題へと進展。セントラルパークの設立の頃にランドスケープアーキテクチャーが世に認められ、その後20Cになってゲルトルート・ジーケルという女性のランドスケープアーキテクト(L.A.)が目覚しい活躍、更にL.A.の学校ができるに従ってアメリカにおけるこの分野の社会的地位は確固たるものになり現在に至っていること、最近では「ウィンターガーデン」などのように建築家のパートナーとしてのL.A.の活躍に興味深い例があるとのこと。五島さんとはコンタクトをとりながら我々もこの分野について勉強し、一緒に仕事に取り組める機会を是非持ちたいものである。

■第10回海外交流会の会予告 第11回UIFAハンガリー大会報告会

日時：11月30日(土曜日) 13:30~16:30 TEL:03-5322-6500

場所：リビングデザインセンターOZONE 8Fセミナールーム B (新宿パークタワー)

■役員会の報告

第4回役員会(96年6月18日)役員11名出席

総会の総括。UIFAハンガリー大会について。東京女性財団助成研究(平成8年度)について。UIFA日本大会について。

第5回役員会(96年7月11日)役員12名出席

UIFAハンガリー大会について。東京女性財団助成研究について。UIFA日本大会について。第10回海外交流について。

第6回役員会(96年8月7日)役員10名出席

第9回海外交流会総括。東京女性財団助成研究について。UIFA第12回日本大会について。UIFA第11回ハンガリー大会について。

■広報だより

お忙しい中、快くハンガリー大会の原稿作成をお引受け頂いた皆さまどうもありがとうございました。

来る11月30日、第10回海外交流の回でこのハンガリー大会参加の報告をいたします。ビデオ・スライド等も用意しました。多数のご参加をお待ちしています。

担当：飯島、川嶋、柏原